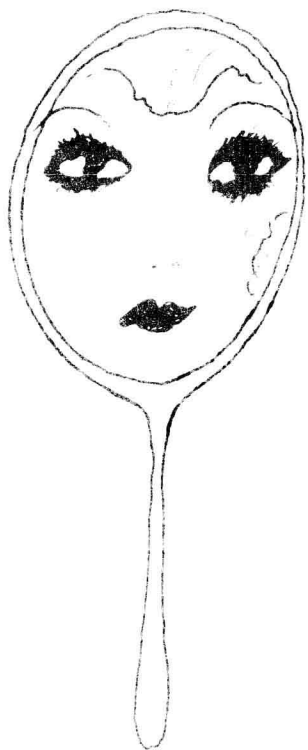


窓を開けますか？

田辺聖子

窓を開けますか？

田辺聖子



新潮社版



窓を開けますか？

昭和四十七年十二月五日発行

昭和五十六年八月二十日二十一刷

著者 田辺聖子

発行者 佐藤亮一

発行所 新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七十一

電話 業務部 (03) 二六六一五一一
編集部 (03) 二六六一五四二

振替 東京四一八〇八

三晃印刷、神田加藤製本

定価九二〇円

© 1972 Seiko Tanabe

Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小
社通信係宛御送付下さい。送料小
社負担にてお取替えいたします。

バラ色の人生……………5

バラの肌着……………34

バラの寢床……………76

バラ色の月……………140

バラの海……………236

装帧
陈本唯人

窓を開けますか？

バラ色の人生

1

出張からもう帰ってきたころだと思うのに彼から電話がないので、私はかけてみた。

はじめは妹さんが出て来た。

「麻雀マージャンしてます」

といって呼びにいった。何だ、帰ってるのか、帰ってるのなら帰ってるといえばいいのに。彼が麻雀なんか、のんきそうにしてるのが私は不服だった。

「ヤア」

なんて出て来たけど、私は昨日帰ったことや、名古屋が寒かったことなどだけ聞いてすぐ切った。彼も横に人がいたのか、

「ほな」

とあっさり切った。

しかしやはり、夜の十一時すぎ、彼からかかって来た。

はじめに母が出たものだから、まずいな、と思っていたら、案の定、母は私に渡して、

「桐生きりやうさん」

といって老眼鏡ごしに私をじろっとにらむ。

「あ、さっきは大きに。あれからツキにツイてな。武やんから三千円まきあげたった」

彼はゆったりした声でいう。タケヤンというのは、彼の大学時代の友人で、麻雀仲間である。

「のんきねえ……帰ったんならそういつてくれればいいのに」

「うん、忙いそがしてな」

「忙しくても麻雀はするんでしょ」

「まあ、そういうなよ。淋さびしてしょうないさかい、麻雀しててん」

なんていう。可愛らしい。ちょっと声を小さくして、

「尼御あまご前まへいてはるか、そこに」

という。

彼は、私の母のことを、「あまごぜ」と呼んでいる。母は風呂場にいた。

「どうしたの？」

「うん、……あんたが先に出たら言おう、思おもってたけど、尼

御前が先やったよってに、出バナ挫こかれたがな……あのッ

……あの、な」

「何やのん？」

「いや」

と珍しくためらって、

「このあいだの、あそこへいって昼めしでも食おか、思たんやけど、あした」

と恥ずかしそうにいった。

「うーん、そうね」

「あかんかったら、ええねんけど……」

「ええわ、いく」

「いくか？」

彼はうれしそうだった。

「ああよかった、やさしい声が聞けて。ほんなら、おやすみ」

と彼は切った。やわらかな、肉感的な、ひびきの深い男の声だった。

切ってしまうと、私はあんまり大きな満足感のために、チェッ、チェッ、と舌打ちしたいくらいだった。その中には、こいつ、どうしようもなく、私に惚れやがって、という、いささかの軽侮もあるのである。

桐生保之は四十一歳になったばかりである。西神戸に機械きかい（なんの機械か、なんべん説明してもらってもわからな）の工場をもっていて、小さい会社だけれども、彼は社長である。小さいけれども、堅実だと彼はいつている。欲はない、と桐生はいう。仕事と腫はれもんは大きくなったら潰つぶれる、というのが彼の信条で、

「なんでそない赤眼吊あかめぶってガサガサ儲もちけんならんねん」というのである。手堅く小さく儲けたらよいという。

しかし彼の家庭は手堅くないのである。老母と出戻りの妹と、中学生の娘がいるが、奥さんとは三年ほど別居していた。

離婚話は難航しており、桐生ははじめ、別居はしたもの、娘のためにいつかはひよっとしたら、もとへ戻るかもしれないという気はあったようだ。

しかし一年ほど前、私と会ってからは、ハッキリ離婚の決心をかためたという。

彼の奥さんは中学校の先生で、いまは天王寺の実家からも出て、ひとりで大阪の阿倍野へんのアパートに住んでいるのだった。

これは私の想像であるが、彼の奥さんは、彼にまだ未練があるのではないかと思う。しかし桐生は、

「いや、僕はもう、かなわん。僕な、いっぺんキライや思
たら、もうあかんねん」

といっていた。

すると私の心に、そうまで桐生にきらわれる彼の妻を
毒に思う気持が湧くのだった。

それは優越感ではなく、もし自分も、彼の妻のようにき
らわれたらどうしよう、という遠いかな不安があるか
らである。それは彼への愛情から生れる不安かもしれない
けれど、私は桐生の口から「妻がキライだ」という直截な
言葉聞くのは、ドキドキするほど残酷な気がして、いや
だった。しかし桐生は、妻についての話はしない。避けて
いる。

翌日の日曜は快晴で、あたたかな冬晴れだった。

「桐生さんとドライブにいくわ」

などと尼御前をたぶらかしたのが、間違いのもとだった。
母は何思ひけん、

「ほんなら弁当でも作ったげようか」

などといい出した。

全く、何思ひけん、だ。めったにそんなこと、いったこ
とがないのに。

「いいよ、いいよ」

というのに、母はおにぎりを作ったり、卵を焼いたりし
はじめた。どうしようもない。以前、兄がまだ結婚する前、
魚釣りだ何だというと車に弁当を積んでいっていたので、
その記憶があるからかもしれない。

十二時の約束に、桐生はもう十一時半には来た。車のド
アがバタン！ としまる音がして、すぐ格子戸があき、ワ
クワクした声で、

「ハイ、こんにちは」

と顔を出す。

彼の浅黒い、いかつい、肉の厚い頬はうれしきで弾けそ
うな笑いをたたえていて、太い黒縁のロイドめがねの奥の
眼は、かくしきれないよろこびに輝いている。だいたい、
それだから私にバカにされるのだ。十二時の約束に半時間
も早くくるなんて、女に見くびられ、くみしやすいと思わ
れても仕方がないではないか。私と顔が合うと、エヘ、エ
ヘへなどと、まっ白い歯を出してこらえきれず笑う。そ
れが四十一の中年男のすることか、というのだ。

中年というのは、もつと毅然として、あたりを払う威厳
にみちて、うれいのか怒ってるのか、わからぬような顔
でいなくてはならぬ。少なくとも、ウチの会社の部長や次
長はそうである。いや、三十五、六の課長でも、すでにそ

んな感じで、貫禄がある。いやしかし、彼らも会社を離れて個人的な時間をもつときには、桐生のような顔になるのであろうか？

けれども私には、桐生は、桐生であるがために、そんな顔を女にみせて見くびられても平気な、正直な男なののだと思われる。そして私は、彼のそんな所が好きなのだから仕方がない。

彼は母に挨拶して、

「よう冷えますな、例年より寒いみたいですねあ」

などと愛想よくしゃべっている。そういうところは世故^{せこ}たけた感じで、まあいえば、そこもよいのであった。なぜかという、正直な部分は私を不安がらせるが、世故^{せこ}たけた部分は、私を安心させるからである。私は桐生が、自分の身過ぎ世過ぎもろくにできないような男であってほしくなかった。世故^{せこ}たけた部分と、世間しらずなほど正直な部分が一しょに抵抗なく、過不足なく、あつてほしかった。桐生はどちらかという、世故^{せこ}たけた部分は少ないほうである。まあそこも、桐生らしくてよい。何でも彼ならよく思える。

要するに私は、桐生を気に入っている。そしてそれは、私よりもほんの少しばかり桐生の愛情のほうが大きいらし

い、その満足感からも来ている。

私は、こっちの方がたくさん愛していて、相手の方が少ししか愛してくれない、なんてつまらないからいやである。第一、そんなにこっちから惚れこんじゃ、気の休まるひまがない。男の一瞥^{いつぱん}一笑に気をつかい、男の機嫌に一喜一憂してたら、私はとても身が保たない。向きあったとき、どきどきして、どこ見てたらいいか、わからない。ずっと若いころ、そんな経験をしたことがあって、私はそれから、本気に惚れるのをおそれるようになった。本気に惚れてるとき、女はみにくくなるからである。

しかしそうかといって、桐生に惚れていないというのではないけれど、彼の方があんまりスピードをあげて突っ走るので、ついていけないというのが、いまの私の心境であろうか。向うは時々たち止って私を待っている、私は悠々と歩いていく、それを向うが冷や汗ながし地団太ふんで、早く早くと追いつくのを待っている、そんな関係に思われる。そうしてそのときの、待たれる側の余裕は私には好ましいもののなのである。

桐生は私の勤めている会社と一度だけ、取引があった。そのとき顔を合わせて、そのあと、三宮^{さんのみや}のバーで会った。そのママは私の兄の友人の奥さんだったから、私もちょ

くちよく行くところだったのだ。

私の家が御影^{みかげ}にあつて、芹屋^{せいや}の彼のうちへ帰るとき、道順だったから、送ってもらつた。彼のそばにいるのはたのしかった。

「人間で、一生、楽しイにおくれたら至高の人生ですな。

ちがいますか、岸森さん」

と彼はいった。最初のころだから、ていねいな言葉遣いを両方していた。

「死ぬとき、ああ楽しかった、いうて死ねたら、よろしやろなあ」

「そりゃ、もう」

と私は賛成した。私は彼の大きな筋肉質の体が、だんだんそばへ寄ってくるのに氣付いていたが、不快ではなかつた。彼は突然、

「手紙ください」

「エ？」

と私は頓狂な声を出したと思う。

「読んでたら、淋しくないヤツ」

「どうしてですか」

「岸森さんとしやべつてると楽しいからです」

「桐生さんは淋しがりですな」

「そうや、淋しがりや」

「大きな図体してて」

「図体が大きいから、心も大きくて、いつもがらあきです」

「じゃ発泡スチロールでも詰めたらどうですか」

と私はいった。そして彼の手を振り払つた。

「手紙書かれへんかつたら電話教えて下さい」

桐生はそういい、私のいう会社と家の番号を書きとめた。そうして私はそのとき、この男は無類に正直で純情なのか、とんでもない色ワルか、判断がつかなかったのだ。

私の家までくると、彼はいいというのにわざわざ車から下りて、門まで送つた。二、三日して、私が彼に電話したのは、氣まぐれだったが、彼は会社にいた。

「あッ、岸森さん、僕、電話かけとうてたまらんかつたんや」

と弾^{はじ}んだ声でいい、

「そやけど、あんまりすぐかけたら、きらわれへんかしらん思うて……」

という。会社だから、あたりに人がいるだろうに、彼はあたたかな、いそいそした深い声を出していた。その晩、バーで会つた。

「いや、あのときは横に誰もおれへんかった、ほんまに、ほんまに、有難う」

と彼はいった。

「うれしてねえ……涙、出てきた」

「また、安っぽい涙やねえ」

「いや、ほんま。こんなことがあるさかい、人生もやめられん、なんて思てまう」

私は耳を疑う気持だった。ちょっと、あんた、エエ年してそんなこというててええのんですか、なめられてしましますよ、という気がする。そして、この男はとんでもない詐欺師か、倒産常習者か、性格破産者ではないかと、一瞬警戒した。

それで、彼が、二、三べん目にあったとき、

「いっぺん旅行したいですなあ」

といったので、かえってホッとした。

私には、男というものはそう来るから、かえって安心できるところがある。そういうわなさや、ほんものの詐欺師か、スケコマシか、道楽に偽善をよそおってる奴であると思われる。それは三十二歳という、私の年齢からくる分別である。

桐生が母にゴマをすっているあいだに、私はジャージイのあかるい茶色の服に着更えた。私は三十二だけれど、二十五から先は、ほとんど変っていないと思う。いつか、高校のクラス会にいったら、もう小学校一年生をもっている友達、安達ヶ原の鬼婆みたいになっているのに一驚した。そういう私を見た友達のほうはまた、

「あら、亜希子さん、まだ独りやのん？ 早う結婚せな、老けるわよ」

と自分の老けたのを棚にあげていった。

しかし私はその友達みたいに齒もぬけていないし、目もおちくぼんでないつもりである。生えぎわがうすいといって、かつらをかぶることもないし、付けまつげをしたり目の隈を入れたりしない。そういうことをしなくても、私はまだ自分で鏡を見て、二十七、八ぐらいにしか見えないことを知っている。そして、自分がまだ若くて美しいことを、ハッキリ自覚させてくれたのは桐生だということも、知っている。

彼といっしょにいる車の中は楽しかった。彼は私のやったカフスポタンをしていた。

神戸の郊外へぬけて、小野へ出た。ここには古い大きな池があって、鴨がわたってくる。寒風の中を鴨は水を打っ

てまい上り、陽の光をうけてまた向きを変えてむれ飛んだ。松林の中は夏のあいだはキャンプで賑わうが、いまは人影もなく、

「ハイ、ちょっと、こっち向いて」

と彼がいうので、私はクリーム色のコートのポケットに手をつつこんだまま、

「何よ」

とふりむいたら、彼にバチリと写真をとられた。

ほんと、どうしようもないなあ、と私が思うのはそんなときである。桐生はうれしげに私を横向かせたり、しゃがませたりして、写真をとる。無心にうれしそう、困った男。

「カラーはいったあんねん」

なんて、中学生みたい。よく晴れていて対岸のゴルフ場も澄んでみえた。崖や水ぎわで私も彼の写真をとった。

六甲まで帰って来て、山のふもとにあるホテルへいった。小さな、山の見えるホテルで、私は松林の中にある異人館みたいなこのホテルが好きである。ここは夜になると、三宮のネオンの海が窓いっぱいに見える。

「わが家へかえるとホッとする」

なんて、桐生は私を笑わせる。

「何をたべようか」

「あ、そうそう、お弁当つくってくれたんやわ」

「尼御前の好意を無にしたらあかんなあ」

「そうよ、食べよう」

「また、何思て作りはってんやろ」

と、折箱のふたをあけた。

桐生はさらにトンカツをとって、ビールをたのんだ。テールにそれらが並ぶと、豪華な食事になった。

窓の外に灯がきらめきはじめて、私の好きな夕ぐれになった。

「早う、家でこない、したいな」

なんて桐生はいう。

こんな純情なこという男って、少しぬけてるのんちがうかしらん、と私は思い、彼は早死にするのではなからうか、と心配になった。

「やっぱし、二人いっしょに暮さなあかんねんで。一緒にいてこそ、面白いねんで」

「ときどき、こうして会^あうてるだけでも、楽しいやないの」

「それはそうやけど」

食事がすんでからの時間は、とてもよかった。

「さらい年の春、なんて遠いなあ」

と彼はいった。

さらに年の春、というのは、彼の娘が中学を卒業する年で、それまでには彼は、ちゃんとつづまりをつけたいといっている。彼の妻と離婚を成立させ、私と結婚したいといっている。

「早よ、一緒になりたいなあ」

「このままでも、結婚してるのんと一緒なんか」

と私はいった。

「そらちがう。べつべつに帰るような仲はあかんよ」

「そうかね」

「一緒の家へ、一緒に帰りたい」

その家には彼の娘がおり、彼のかつての妻が住んでいたのだ。その妻はいまだに離婚に応じないでいる。私には、彼の家には彼女の執念がたちこめている気がする。

2

私はちっちゃな時は、愛くるしい子だといわれたものだ。ちっちゃな時の写真を見ると、丸顔で、目がビクリしたように顔の両端にくっつき、目と目のあいだがはなれている。鼻が丸くて笑うとマンガのような顔になっている。髪

がちぢれ毛で、エヘヘ……と笑って虫くい歯がみえてる子供である。

二十代の写真も、三十をすぎたいまでも、私の顔は気持と同じように子供っぽい。

もっともオトナの女の情感がでてこない。体つきも、あんまり男を悩殺するタイプとは思えない。知ってるんだ。

悩殺はしなくても、なみの女程度の色気が出ればよいのであるが、ずっこけた感じがあるだけで、どこか変ってる。それで、私には桐生が私のどこを気に入ってるのか、わからない。私が思うに、桐生もかなり変ってる男だと思うのである。つまり、変りもん同士である。

桐生自身も、中年男の貫禄というか、物々しい構え、み
たいなものがない。

軽佻浮薄けいちょうふはくというのともまたちがうが、惜しげもなく本音を吐いて平気な、無鉄砲な、物しらずみたいなものがある。正直なことをいう人に特有の、腰軽こしやすさみtainいものが感じられる。もっとも中年のオッサンみtainいな老獪らうかいな、不可解なところがない。

それだけの正直さを温存して、そのとしまで生きてこれたのは、よっぽど彼自身の個性が強いのか、それともそ

んな環境だったのか、家庭も職場も。

変人同士二人は何となく気があうのかもしれない。ウマが合うのである。

私は桐生みたいに、最初に会って、二、三べん目にくだかれたなんてはじめてだった。

「早すぎるやないの」

といったら、

「時間に関係あれへん。一べん会うて、アッ、これや、思う人もあるし、十年会うても馴染^{なじ}まれへん人もあるし」

「でも、あんまり自慢できることとちがう」

「何も、屋根の上へあがってメガホンでどならんかて、ええがな」

「あたし、マジメ人間なのよ」

「僕かて」

と、白い歯をみせてニコリ笑う。私がずっとこけた子供みたいな顔だとすると、桐生もいまだに腕白坊主みたいな顔なのである。

「しかし誰に迷惑かける、いうもんやないねんさかいね。

べつにカッコするほど悪いことしてへん。首くくって世間にお詫びせないかんほど、人のミチにはずれとる、とも思われへん」

「それはそう」

「そのうち、どうせ結婚するねんし」

「まだ、何とも返事してないヨ」

「まあ、まあ」

と桐生はうまくあやして、

「ややこしいことは、みな、僕に任しといてんか。とにかく僕、惚れてるねん。まァ長生きして、ぼちぼち、いこか」

ぼちぼちいこか、などといわれると、上方の人間としてはじつに困るのである。何となく雰囲気だけで、そやなあ、と共感してしまふ。

その共感の中には、条件を出したり、底意をせんごくするようなものはなく、何となくずるずるに、賛成しないまでも反対しないような気持ちにさせてしまふ、ふしぎなムードがあり、関西弁というのは正確なようなら、ろんなようなところがある。

そんなことをしゃべりながら、そのとき車を走らせていたら、山手のホテルをみつけた。いや、桐生はこのホテルをみつけるために、まる五時間、前もって物色しあるいだった、という。

それはほんとかもしれない。私とどこかへご馳走をたべ

にいこうという時は、あわただしく服のかくしから定期入れを出し、その中から小さい紙片をつまみ出して、

「このあいだな、新聞にのつたつてん。いっぺん、あんたといこ思て、切りぬいといてん」

などといい、その新聞切抜きをたよりに店をさがしあてゐる、そういう男である。彼はもう何十年も神戸に住んでゐるくせに、気の利いたレストランも小料理屋もしらず、

「そうかて、今までそんなん、関係ないもん」

「でも、桐生さんとこだつて、お得意さんの接待はするんでしょ」

「しますよ、けど福原の〈鉢巻〉とかへひょうたんとか、まア安もんの小座敷やわな、安仲居がウロウロしてゐるような所や。絨毯敷いたアるとか、テーブルに蠟燭ついとる、とかそんな気の利いたハイカラなことちやうもん、どうせ、機械屋のこっちゃさかい」

「若いお嬢さんとデートすること、なかったん？ パーのホステスさん誘うとか、さ」

「何、しまッかいな。仕事ひとすじですよ、あんた一人だけ。最初の最後」

そのホテルは、屋根に飾りの風見鶏かざりどりがついていて、鉄の唐草模様の門の向う、松林の中にぼつんとあり、私はいっ

ぺんで気に入った。緑色の羽目板と鎧扉よろいどがあつて、それはこのへんに多い異人館と同じ建築様式であるが、だいぶん新しく手を加えたらしく、きれいだつた。へあじさいホテルとあるので、きっと、あじさいの季節には、あじさいが庭に咲き乱れるのだらう。

「ワー、こんな好き」

と私がいつて見惚みとれてゐるので桐生は満足そうだつた。

「そやろ、そう思たんや、だいたい、あんたの好みわかるねん」

個人の邸を改築したらしくて、内部も古雅でゆっくりしてゐた。

三階にも小さな部屋があつて、そこから見る夜景はすてきだつた。部屋の両脇に窓があるので、ガラス窓のそとの灯の海がながめられた。

街のネオンは十二時に消えるものだと知つたのも、そのときである。灯はだんだんに少なくなつていく。それは、街の背後の山に吸いこまれ、没してしまふように、山側から灯が吹き消されてゆく。

もちろん、そここに夜つびてついでに灯もあり、赤や青や黄の灯がけものかたぬめの隻眼のように光つてゐるけれども、それらも宵の口よりは、はるかに少なくなつてゆく。